岩手県南部の豪族屋敷*

池 田 雅 美

中世集落の分類、そして豪族集落の概念、とくに豪族集落の核をなした豪族についての概念は、佐藤甚次郎のいうごとく不明瞭な場合が多い。筆者は豪族の概念を経営規模が家族労働でまかなえない、しかも人格的隷属関係の農奴のようなものをもつものとし、濠・土塁・川・長

北上川中流部における豪族集落の分布

- 1 : 八幡館 2 : 青木屋敷 3 : 古館 4 : 北館
5 : 鈴木屋敷 6 : 古館 (白山) 7 : 鈴木東屋敷
8 : 大館 9 : 千葉屋敷

屋門などの防禦的閉鎖的構えをもつ屋敷を中心とした集落を豪族集落として、その調査に興味をもってから、数年になる。ここにあげる4つの豪族屋敷は、北上川中流沿岸のもので1963年に調べた時の覚え書である。

栗林の豪族屋敷

岩手県胆沢郡前沢町栗林の鈴木幸子氏宅は、現在も完全な環濠をもち、濠の土を盛りあげたと考えられる土塁が内側にある。正面玄関前に立派な長屋門があり、長屋には往時下男を住ませたが、現在は納屋になっている。屋敷は土地台帳によると2500坪、周りには杉と栗のえぐねがとりまいている。

白山内館の鈴木家から寛文12年権内が分家して以来、現在11代。先祖は紀州藤代の城主

写真1 鈴木氏(栗林)宅の環濠

写真2 鈴木氏(栗林)宅長屋門

で、同国藤代外七郷2000余町を所領、鈴木と号した。文治4年4月21日、源義経に従い奥州平泉へ下向し、鈴木重家も衣川大蔵坊へ処寓し、亀井六郎を陣所より召喚して対面に及び当時の軍旅を戮力した。その後8代を経て掃部の後妻権内・三右エ門を生み、夫の死後権内・三右エ門を伴い折居栗林に同居し、寛文12年三右エ門を同郡上麻生村阿久土屋敷へ分家させその後、この権内が栗林の元祖となる。鈴木家系譜により鈴木氏分出表をつくると、寛文12年三右エ門を阿久土屋敷に出してから、享保16年利三郎、寛文元年源兵衛を隠居屋敷へ、安永8年権三郎を新屋へ、寛政2年仁右エ門を町屋敷へ、文化11年茂兵衛を堂田屋敷へ、文政4年亟五郎を前村へ、天明8年常蔵を前屋敷へ、慶応元年良左エ門を川向へ、明治34

* 本稿の一部は東北地理学会1963年秋季大会(盛岡)において発表した。

年 義隆を東隠居屋敷へ出しており、その他年代不明の分家もあり、現在まで分家約15を栗林と折居部落に出している。家屋は5代目の人が建て直し、門も新しく直されているが屋敷の一隅には屋敷神（明神）のほか、文部省が調査したという約720年前の作といわれる阿弥陀仏をまつた堂がある。又、土蔵および穀物倉2があり、えぐねの中には文政5年の庚申塔としての経塚がある。同家所有の文化元年下伊沢折居樋場内改帳、文化2年下伊沢中野村の内折居釜数御改書上扣によると男6女4で10人、文化11年も10人、天保7年御教助として金子調達永久苗字帯刀麻上下御免被成候御事として苗字帯刀を許され、文久2年下胆沢折居高人数御改帳（肝入 鈴木一郎）によれば、家族11人その他下男・下女を使用していた。下男の報酬は3石位、下女は1石位だが下女は被服でもらう。大正13年人夫町買出帳によれば、下男4人・下女5人を使用している。田植時は人夫82人で下男は米で下女は衣類で払われ、40円見当であり、衣類の内訳は、新銘仙1反・朱子帯1反・上布シマ1反・阿波ちぢみ1反・晒白1反・雪袴地となっている。その外馬方も使用し、普請費用・年収入・桑蚕収入・新聞払出など明細に記してある。なお、鈴木幸子氏によれば、昭和の初めまで下男5人をやとっていたという。現在耕地は3町以上で、田植時はやはり100人位かかるという。

川岸場の豪族屋敷

胆沢郡前沢町川岸場の鈴木東氏の先祖は、鈴木氏の家譜によると、「伊豆国加茂郡一字、郡の内鈴木郷、相模国愛甲郡一字、高坐郡の内吉田在家、右為軍功之賞宛行者也仍如件、義家墨印」とあって、7代まで伊豆相模におり、8代のとき本吉郡奥州奉行人（海岸奉行）として下向住居、葛西の家来となり、13代鈴木六郎出羽守重行が和賀阿波守と縁故の為、鬼柳左京太夫と一しよに主人の葛西に反抗して本吉歌津城が潰され、しばらく鬼柳にいたらしい。そして18代鈴木相模守重信のとき現在地に住し、家来をつれて百姓を始めた。鈴木氏所蔵の古文書目録をあげると（1）文政4年下胆沢白鳥村高人数改帳（2）安永9年6月風土記御用書出（3）下伊沢六百人村人数御改帳、享保6年～元文3年（4）定留、仁、義、礼（5）宝暦5・6・9年、明和元・2・3・4・7年 御僉義留（6）宝

暦8年、明和4・5・6・7年 御僉義留（7）明和6年8月7日 諸侯御通行留（8）万延元年、文久2・4年、慶応元・4年、明治2年 御触出（9）書上 義家公より鈴木兵庫頭へ 感状、義朝公より鈴木伊賀守へ 感状、高瀬公より鈴木内匠頭へ 感状、顕家公より鈴木内匠頭へ 感状、晴信公より鈴木彦太郎へ 感状 但し上の通先祖代々所持仕来候、御墨印明和元年獅山様御出駕之御奉入御上覧御帰城否為相登候様被仰渡指上 候得は同2年5月御裏打并御願共に御拵し 被下候事云々（10）平姓鈴木氏家譜（11）大室家伝記、天・地、（12）梁山亭日記（13）常雄一世録（14）重良一代記 拔萃（15）交割伝記録（16）部長録（17）秋懐旧（18）水荊集（19）長者神の記（20）北川齊歌集（21）蝦夷錦（22）宝蝦荒才之記（23）六日入昌伝記（24）荒才録（25）蝦夷風土考（26）伊達鑑（27）寛文事件の覚（28）諸家深秘銘（29）農業見聞集（30）萬書留

この外、相州鈴木郷の由来・義家朝臣過名會関図記事・御知行高書出などもある。古絵図としては、西盤井郡五串村之内山谷御林絵図と下伊沢郡絵図がある。中世古文書も数々所有している。

屋敷は前面に北上川をひかえ、段丘崖を利用しており、堀は現在空堀となり土塁は北西に残っている。堀の内は、昔のシンガリ屋敷で現在1800坪、南の北上川に面したところにヤグラ門があり、段丘崖を上るところにわずかの石塁が残っている。北側にも長屋門があり、昔は全部で門が4つあったという。石塁を数段上ったところに母屋があったが1962年こわして現在新築している。屋敷の南西えぐね中に、内神として長者神社があり、大室権現を祀っている。室の権現は屋敷神であり、長者神社は先祖をまつた神で、屋敷神には旧9月1日に献膳を2膳した。生きた鮒を2匹ずつと、赤飯とおみきを供えた。また、神社の祭は旧2月の卯の日で、旧1月15日に餅をつき、直径5cmのものを24個とっておいて、2月の卯の日に焼餅にして、これとコブ・田づくり（ゴマメ）・かぶ・おみきを供える。そのとき、焼餅の中1つだけ供えて、あとの23個をカブぞうににして主人だけが食う。その後古文書をみせるので、それ以外の日には、絶対古文書類をみせない習しである。また、屋敷の南には藩政時代の御蔵場があった。伊達藩になってからは郷土として農業経営をし、直参として苗字帯刀を許されている。大肝入になつてからは肝入役・御蔵守・ひらた肝入・新御買米御用帆役御判肝入・鮭御子籠御用・御材木受払役御買人などの役もつとめ、六日入

邑伝記によれば、明暦年間に名子は5人・水呑1人となっている。はじめの分家は寛永5年で、4貫791匁を与えているし、延宝年中は1貫282匁を与えて別家させている。これは、血縁関係でないらしい。また、元禄2年には2貫214匁で分家させているが、まもなく亡くなったので、この干場屋敷2貫214匁はそのまま戻った。次は元禄3年、2貫117匁で分家させ、宝暦5年には1貫829匁で分家、明和2年には1貫838匁で分家、これも血縁でなかったらしい。次は安永3年、2貫39匁で分家、それ以外はよく調べ得なかったが分家額計13貫796匁のようで、これを大室家録からみると、分家前の持高が10貫898匁となっていて、このままでは足りないはずであるが、これは近在のものから買いとった土地もあり、分家ですぐ亡くなって戻った土地もあり、また延宝8年には1貫235匁の銭神屋敷から持高を譲りうけているし、更に天和元年には合野屋敷から持高1貫76匁の地をゆずりうけたりしているので、不思議ではない。現在の耕地面積は2町歩、畑地7反位、また名子・水呑の外に大肝入のとき罪人を領主からおくられ、奴隷にしたものもあった。えどうしは内えどうし(チキ別レ)10軒、外えどうし15軒、内えどうしは川岸場に9軒、姉体に1軒、外えどうしは川岸場・水沢・姉体・大船渡・黒石など他の部落もある。川岸場の東氏宅を中心に、その付近だけに分家14軒をもつ豪族集落である。ただ疑問の点は、同家の墓地には文禄のころに住みついたという18代重信の墓があるが、その墓地には天正6年10月24日孝子重信白と刻まれた板碑の経塚があることである。これも何かの資料で解決したいが、豪族屋敷であることは明らかである。

白山の豪族屋敷

胆沢郡前沢町白山内館の鈴木正郎氏宅が、栗

林鈴木家の本家であることは、両家の家系図の対照によってもうかがうことができる。同家系図によれば、先祖は紀州、藤代城主也。同国藤代外7郷2000余町所領、鈴木氏と号し、治承元年11月10日卒となっている。その後、鈴木三郎重家源九郎判官義経公に仕え、文治2年陸奥に下向、同5年4月28日泰衡征伐の節、重家討死、嫡男重光も17才で共に討死、建長2年3月鈴木重徳奥羽下向父及兄供養為胆沢郡、麻生郡居住、是内館脇也とあり、その後、建武2年葛西の家臣となり麻生の中12貫文の知行となる。応永17年には葛西晴信公から大刀持領、当城主より具足2を拜領している。しかし永禄元年、麻生城主左京太夫の勘気を蒙り、鈴木次郎少輔は西磐井郡衣川郷に退去し衣川に住した。更に天正13年、伊達政宗公のために、麻生の館落城当城主白川に落行してから、麻生館脇の本の吾屋敷12貫文の地を取戻した。現在28代。屋敷3反、田7反と農地解放で減っているが、屋敷は殆んど周囲全部にえぐねがあり南西隅に氏神、大館稻荷大明神を祀っている。西から北にかけて内堀があり水を湛えている。西の田の中の小高くなった丘に館があったそうである。分家は20軒、同じ部落に7・他部落に13となっているが、全部鈴木姓を名のり、正月には内えどうし、外えどうしも全部集るといふ。分家の中、名子3軒あり、また下男も使っていた。

下柳の豪族

水沢市黒石下柳の千葉氏宅は山上にあり、門には慶長2年の刻みがあり、15町の田を名子に耕作させ屋敷には立派な氏神八幡社もあり、濠の一部も残っている。山手の方に11の溜池をもち灌漑に利用した。また、屋敷内に水神も経塚もある。葛西の下臣で伊達に取立てられた豪族である。

A Village Type in Southern Iwate Prefecture originated in the Mediaeval Age

Masami IKEDA

The relations of some conspicuous families in Isawa-gun, Iwate prefecture are traced back to the mediaeval age. They were of local importance, and their houses have some common characteristics such as moats and embankments and often made nuclei of village agglomerations.